

ハート・オブ・ゴールド



vol. 5

2001年4月20日発行
 発行/編集 ハート・オブ・ゴールド事務局
 本部 〒701-1213 岡山市西幸川872-2
 T&F086-284-9700
 メール:kukoi@po.harenet.ne.jp
 東京 〒104-8001 東京都中央区銀座8-4-17
 Tel:03-3575-5196 Fax:03-3575-5887

「オリンピック・ベビー」

特定非営利活動法人
 ハート・オブ・ゴールド
 副代表理事 ローレン・モラー

2000年のシドニーオリンピックをテレビで見っていました。この時、私、ローレン・モラーは45歳でした。私がオリンピックへ最初に出場した時から、なんと20年が経っています。選手団が各国の公式ユニホームを着て、開会式で行進しているのを見た時、胸が張り裂けそうになりました。その思いが高まった時、陣痛が始まりました。テレビを見ている時に、私の赤ちゃんが生まれそうになったんです！

その2日後の9月17日、ジャスミン・テヤ・モラー・スミスは生まれました。9ポンド(≒4080g)の元気な女の子です。私はこの赤ちゃんに“私のオリンピック・ベビー”と囁きました。その時私は“私の金メダルをとうとう手に入れたわ”と思ったのです。

現在、私は母親として忙しい日々を過ごしています。でも、まだ12人の様々なレベルの陸上選手のコーチも続けています。選手たちにも、私が持っている“ハート・オブ・ゴールド”(心の金のメダル)に関わっていかうと思っています。

これからも母親になってますます人々を助けたいと思うようになりました。私の心の扉は広く開け放たれたのです。

“My heart is open”



第5回アンコールワット国際ハーフマラソン

1996年に14カ国654人の参加者で始まったこの大会は会を重ねるごとに規模が大きくなり、第5回目の今年は、前日のウォーカーズ・エイドと合わせて21カ国1,558人が参加し、過去最多、アジアでも大きな大会の一つになりました。マラソンというスポーツそのものが、ほとんど理解されていないカンボジアで、地雷被災者への支援というチャリティーマラソンとして、日本人ボランティアの人々によって始められた国際大会が、徐々にカンボジアの人々に受け継がれ、カンボジア人自身の手で運営される日もそう遠くないように思われます。

また今年は、カンボジアから義足の方や車椅子での参加の方が増え、日本からも盲目のランナー友光隆子さんの参加もあり障害者スポーツの広がりも強く感じられる大会となりました。子どもたちの参加も多く、この大会が世界遺産アン



コールワットの地に深く根を張って行く様子を感じることができましたのも、多くの皆様方のご協力の賜物と深く御礼申し上げます。次第です。

なお、大会出場者のエントリー費用の全額に加え、ハート・オブ・ゴールドからの寄付、団体・個人からの寄付を合わせて、28,076US\$をカンボジア赤十字、カンボジアトラスト、ハンディキャップ・インターナショナル、カンボジア身障者陸上競技連盟へ義足代として、さらに大会運営協力金として350万円を送りました。

有森さんと一緒に走ったハーフマラソン

コン・ソップア (15歳・中学1年生) (抜粋)

有森さんお元気ですか。去年の12月1日にスナーダイ・クマエにきましたね。僕はその時「20Kmを有森さんと一緒に走りたい」と言いました。有森さんは「じゃあ、はしりましょう」と言いました。とても嬉しかったです。ハーフマラソンは初めてでした。練習をたくさんしました。とても疲れましたが、みんな頑張りました。

シエムリアップは遺跡がたくさんあります。ハーフマラソンはアンコールワットの周りを走りました。たくさんの方が走りました。僕は、有森さんとサルン君と一緒に走りました。ずっと有森さんは僕達を助けてくれました。有森さんはマラソンが上手でとても有名です。僕達は速く走れません。「有森さん早く走ってください」と言いました。でも有森さんは僕達とずっと一緒に走りました。有森さんはいつも笑って、みている人たちにもいっぱい話しました。僕は有森さんの笑っている顔

をみて、えらくありませんでした。たくさんの人に話していて、ほくもうれしかったです。ゴールしたとき、とても嬉しかったです。有森さんと一緒にハーフマラソンを走って本当に嬉しいです。スナーダイ・クマエの中で僕とサルン君だけです。みんなも来年は、有森さんと一緒に20Kmを走りたいと言いました。スナー



ダイ・クマエに帰って、日本語の先生とマラソンの事をいっぱい話しました。そのあと、サルン君と僕は有森さんのサインの入ったT-シャツを先生からもらいました。とても嬉しかったです。僕のたからものです。有森さんたちはカンボジアの人達、地雷で足がとんだ人をいっぱい助けました。

僕は日本語の勉強とクメール語の勉強を頑張っています。僕は高校・大学にいきたいです。日本語をもっと勉強して、日本語のガイドをしたいです。お金をたくさんもらって、ホームレスの子どもを助けたいです。来年もスナーダイ・クマエ孤児院にきてください。一緒に走ってください。

ハート・オブ・ゴールド顧問・理事

代表理事	有森 裕子	名誉顧問	桜内義雄
副代表理事	ローレン・モラー	顧問	青山敏彦
理事長	萩原 隆	顧問	伴純之助
副理事長	緒方由美子	顧問	小川秀樹
理事	君原 健二		
"	高石ともや		
"	松村 政子		
"	山本 佳子		
監事	市川 捷治		

カンボジア貧困層のための農業訓練プロジェクト

(野菜栽培技術移転)

スポーツNGOであるハート・オブ・ゴールドがカンボジアで行って来たアンコールワットハーフマラソンを通じて交流が始まったシエムリアップで、郵政事業省の国際ボランティア貯金からの協力が得られた。協力パートナーNGO「スナーダイ・クマエ」と共に貧困層のための農業訓練プロジェクトが計画され平成12年6月から開始した。ハート・オブ・ゴールドから農業専門家として、2000年10月16日～21日に元JICA専門家（野菜栽培）の木村三男氏が現地指導のために派遣された。以下木村氏の農業技術指導報告書からの一部抜粋

「調査および技術指導の内容」

●スナーダイクマエ第一農場

農場の規模は約2ヘクタールあり周辺は田んぼや湿地の広がる地域である。農場は湿地の部分、果樹帯、建物で約半分を占めており残りが野菜圃場である。土壌は有機質の少ない砂質から粘土質で掘り起こすと40cm～50cmで水が出た。雨期はそれなりに雨が降り水も溜まるとのことであったがしっかりした排水路を掘ってやれば大洪水が無い限り対応可能であろう。それよりも問題になるのは乾期の貯水量である。特に4～5月は水が少なくなりかつ高温でもあるので野菜のダメージは大きいと予想される。野菜の種類によって水の要求度が異なるので



農場の簡易地図の作成と区画整理（ナンバリング）今後の管理記録の作成を指導し、具体的な栽培方法としては苗の定植の方法、藁マルチの有効性、トマトの雨除け栽培の可能性等々について指導した。

●スナーダイクマエ第2農場

開墾部分は12,000坪程度（一部にバナナが植えられている）、未開墾の部分は相当あるが面積ははっきりしない。農場入口から開墾部が広がりその先の未開墾の部分との境を川が流れておりポンプを使用しての灌漑が可能である。乾期でも水が枯れることは無いとの情報であった。

圃場は雨期でも通常は湛水することはないようなので管理さえすれば果樹の栽培が可能と思われる。今後は果樹の品目選定や栽培指導のために果樹専門家の派遣が必要である。

「市場調査」

シエムリアップの町はアンコールワットの遺跡観光の拠点であり飛行機が首都のプノンペンやタイのバンコクからも乗り入れておりホテルも数多い。よって野菜や果樹の需要は今後も増えていく可能性が高いので現在は米だけを栽培し野菜は自家用ぐらいしか作らない貧困農家が品質の高いものを生産できれば換金作物として大いに期待できる。町の中には2つの大きな市場があり野菜、果物だけでなくあらゆるものが並んでいる。

「考察」

現地の試験農場スタッフは専門家のBunthoeun氏をはじめとして全員が栽培技術の習得に熱心であった。現在は周辺農家が来場した時に野菜栽培の指導等を行っている状態であるが、今後年間を通して野菜を作る技術が確立して行けば地域の拠点となり得るといえよう。今後は農場の栽培試験をデモンストレーションとして活用し貧困層の人が興味を持って自発的に来場するような環境づくり（集会所の建設等）に力を入れるべきであろう。第2農場の方は果樹を主体としたデモンストレーションファームとしての体制作りを支援すべきであろう。

国内外におけるランニング大会 講演会 他 (2000年8月～3月)

□講演会：堺・埼玉・奈良・岡山・杵岐島・八戸・長崎・佐賀・佐倉市・東京・倉敷・岡山・広島・三重・静岡・水島・大阪他

□パネル展：玉野高校、岡北中学、後楽館中・高校、商大付属高校、奈良エコ&ピース

□ランニング大会：吹田中ノ島5時間走(9.24) 神戸ハロウィンラン(10.29) 掛斐川マラソン(11.12) 河口湖マラソン(1.26) アンコールワット国際ハーフマラソン(12.3) 杵岐島新春マラソン(1.14) 千葉マリンマラソン(1.21) みかた残酷マラソン(3.4) 千里国際マラソン(3.14)

日本語を教えて

檜尾 睦

2000年9月より、スナーダイ・クマエ孤児院で日本語を教えました。4歳から18歳の30名の子ども達が対象で、入門・初級1・初級2の3クラスに分け、月曜日から金曜日まで1日各1時間ずつの授業でしたが、どの子どもともよく頑張ってきました。いろいろな表現のしかたがある日本語を学習する事は、外国の人にとってはとても難しいですが、興味を持って取り組んでいました。スナーダイ・クマエ孤児院の中での体験や経験は限られているので、例文練習などで、言葉の制限があったり、限られた教材の中での授業であったり、教える語彙をクメール語に直さなければならな



ったり教える事の難しさを実感した6ヶ月でしたがとてもよい経験となりました。近い将来、子ども達が日本語を使って、アンコールワットの遺跡群の観光ガイドやホテルでの就業ができる事を願いつつ、一人一人の子ども達の成長を見守っていききたいと思います。2001年4月

本学がハート・オブ・ゴールドと関係したのは、1999年末頃であった。ノートルダム清心女子大学で「国際ボランティアと理念と実際」授業を担当したが、1999年度よりボランティア体験(実習)を取り入れることにしていた。授業の受講学生の希望も入れて、ハート・オブ・ゴールドのスタディーツアーに参加して、カンボジアへ行くことになり、カンボジアでのNGOの活動の見学とボランティア体験を2000年2月に9名の学生とすることにした。

このツアー参加した学生は、非常に感銘を受け、夏休みに3名の学生が1ヶ月、スナーダイ・クマエ孤児院、2名が半年後ブンペンを再訪して滞在してきた。また、2名は、12月にハート・オブ・ゴールドが主催する「アンコールワット国際ハーフマラソン」にボランティアとして参加している。本年1月も、代表有森裕子氏が上記授業の特別講師として、学生に話をしてくださり、本年も第2回目のスタディーツアーとして、2月25日より3月6日まで、約10名の学生たちがカンボジアを訪問した。

国際ボランティアという貧しい国々になにかをしてあげる、あるいはなにかものをあげると考えがちである。貧困にあえいでいる、飢えている、学校がない、医薬品がないという現実を目のあたりにして、さしあたり何かをあげることが無用とはいえないが、多くのNGOの活動は、そのような活動が、本当に困っている人々のためにならなかつたことを体験として、わかりつつあるように思える。「してあげる・してもらう」関係は、対等な関係でなくなる。大切なのは、対等な人間としての心と心の繋がりにある。お互いに理解し合えることである。ハート・オブ・ゴールドの活動は、はじめからそれを目的としていることが高く評価できると思う。

ポルポト政権下で、100万とも300万ともいわれる同じ民族が大虐殺され、その後の内戦で疲弊したカンボジアで、NGOの援助活動は、たいへん重要である。援助は、しかたを誤るともらうのが当たり前という依存度を高めるだけになる。カンボジアがカンボジア自身の手で自立・独立できるような援助でなければならない。その意味で、ハート・オブ・ゴールドの活動の継続が望まれる。

(人間生活学科教授 田代菊雄)

本校は、平成8年度から「国際協力」を主軸とした国際理解学習を継続実践しており、5年目になる。その活動の柱の一つとして、平成11年度の3学期(平成12年1月)から、ハート・オブ・ゴールドと連携をとって、「カンボジアプロジェクト」を進めており、現在も進行中である。そのねらいは「カンボジアのスナーダイ・クマエ孤児院の小・中学生と交流活動が続けることによって、環境の違いを乗り越えて心と心の交流を実現し、自分にできることで互いに支えあっていこうとすることができる」と設定している。また、本校は「考えること」「行動すること」の連続による学習を大切にしているため国際協力実践活動を学習に取り入れている。そのための参加貢献の場の設定や専門的知識等の情報・意見交流、外部評価としての役割を、ハート・オブ・ゴールドが果たしてくれている。具体的には、インターネットメールによる交流やオンライン会議、現地との橋渡しなどである。平成13年1月には、代表理事の有森さんが来校し、帰国報告会を開いて、今後の現地への支援活動の方向性について話し合った。

ハート・オブ・ゴールドが毎年開催しているアンコールワット国際ハーフマラソンは、スポーツNGOの特性を生かしたよい企画だと思う。出場申込金を義足支援に全額活用していることや、大会への参加を現地の子どもたちに促すことで、内面から湧き出す「生きる力」を刺激し、また世界へ地雷被害の実態を伝えることに役立っている。本校の子どもたちも、カンボジアについて調べるなかで地雷について知ることができ、そういう大会ならぜひ何か応援したいと考えた。交流しているスナーダイ・クマエ孤児院の子どもたちも出場すると知って、子どもたち全員へ手作りのちまきを縫ったり、応援用の横断幕も作り自分たちの気持ちをあらわした。

国際協力をテーマにした交流をする場合、現地には日本の学校と交流を継続するための体力(物理的・金銭的)がないことが多い。また、日本の小学校も現地の情報をリアルタイムで知ることや、現地との双方向の交流をするための手段をもっていない。インターネットメールは、日本側はできても、現地はできない場合が多い。そういう状況のなかで現地との行き来の機会を本校に知らせてくださったり、作品や贈り物を届けてくださったり、さらに帰国報告会によって現地の子どもの様子を伝えてくださったりするハート・オブ・ゴールドのきめの細かい支援のおかげで、本校の子どもたちの「交流したい! 応援したい! 笑顔を見たい! 調べてみたい!」というテーマが達成されているといえる。さらに平成12年9月よりハート・オブ・ゴールドより現地に派遣されている日本語教師とは、インターネットメールのやりとりが可能になったため、自分達のくらしと比較しながら、カンボジアの子どもたちの現実を考えることができるようになった。

しっかりした理念をもち、ひとつひとつのプロジェクトを大事にし、責任をもって丁寧にやりぬける範囲で活動を推進していることや、次代をになう子どもたちの国際理解学習へのサポートをプロとして内容面、方法面から無償で継続的に行き、本校の子どもたちとの心の交流も実現していること。現地への支援活動がある意味で簡単にお金や物で解決しようとしなくて、心を支え、自立へのエネルギーを自ら生み出せるような環境支援を行っていることなどハート・オブ・ゴールドへの期待は今後も大きいものがある。

(6年担任 青山順子)

参加募集

- 大会名 : 「第1回ハワイアンハーフマラソン」
- 開催日 : 2001年6月11日(月)朝5時00分スタート
- 競技種目 : ハーフマラソン(21.0975km)
- 特別招待選手: 有森裕子さん
- ※大会前日には有森裕子さんによるランニングセミナーも行われます(「ハート・オブ・ゴールド」支援のためお一人様500円の参加料をいただきます)。
- コース : アラムアナ公園をスタートし、ワイキキの大通りを走り、ダイヤモンドヘッドを抜け、カハラで折り返しカピオラニ公園にゴール
- 参加資格 : 7歳以上。但し20歳未満の方は宣誓書に保護者の署名が必要
- 参加費: 4月13日(必着)まで = 7,000円
5月7日(必着)まで = 8,000円
5月8日以降 = 10,000円
- ※エントリー料の一部は「ハート・オブ・ゴールド」に寄付されカンボジアの対人地雷で手や足を失った犠牲者や子供たちに義足を送るなど「ハート・オブ・ゴールド」が世界で行っている活動の義援金として利用されます。
- 主催 : ハワイアンハーフマラソン実行委員会
- お問合せ先: ハワイアンハーフマラソン日本事務局
電話: 03-5467-8293、FAX: 03-5467-8677
- ※便利な大会参加オフィシャルツアーもございます。
詳細は近畿日本ツーリストまで
フリーダイヤル: 0120-443320

アンコールワット国際ハーフマラソン2001

12/1—2

- プレイバント: 青少年リクリエーション大会 日時: 12月1日
(サッカー・バレー・ドッジ 他)
- 問い合わせは: TEL 03-5651-0961 FAX 03-3661-2104
- 日程案: 11月30日~12月4日